極楽寺だより

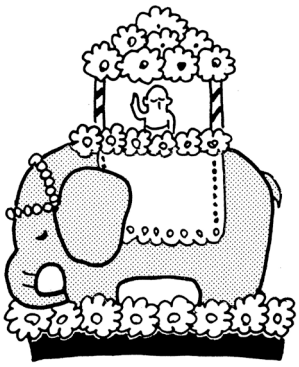
長門市三隅下
野波瀬
0837(43)0625

慈しみの光あふれる春となりました。生命の息吹を感じるとき、お浄土の人となられた方々が懐かしくしのばれます。如来さまのおすくいのご恩、お育てのご恩を味わい、仏祖のご恩を感謝して、春の永代経法要を次のとおりおつとめします。お誘いあわせ、お参り下さい。

春の永代経法要のご案内

日時
四月十六日（月）
昼一時半　夜七時半
四月十七日（火）
昼一時半

講師
広島加計町　正覚寺住職
清胤　弘英　師



お釈迦さまのご誕生を祝い、春の法要の二日間、本堂に花御堂を飾ります。ご自由に甘茶をかけて下さいね。

甘茶お持ち帰りをご希望の方は、どうぞお申し出下さい。

花まつり

オシエノカケラ
極楽寺だよりエッセイ

毎日、お参りしましょう！
キャンペーン　第一弾

「照らされる経験」

皆さんは、毎日お仏壇の前に座って、阿弥陀様に手を合わせておられますか？昔は、当たり前のようにあった風景が、気がつけば珍しいものになってしまいました。阿弥陀様に手を合わせるということは、実は、人間が生きる上において本当に大切なことなのです。極楽寺では、『毎日、お参りしましょう！キャンペーン』を行って、お参りの大切さを再確認していきたいと思います。

さて近頃では、暗い、怖いというイメージが定着してしまったお仏壇ですが、生活の中に金色や赤色、電球というものがなかった昔は、家の中で一番明るい場所だったのです。

金子みすゞさんの「お仏壇」という詩には、

「朝と晩とにおばあさま、いつもお燈明（あかり）あげるのよ。なかはすっかり黄金（きん）だから、御殿（ごてん）のやうに、かがやくの」

とあります。昔の人は、お仏壇の明かりに照らされて、生きておられたのです。ところが、近頃は自分を輝かせようという時代ですから、自分を照らして下さる光が見えなくなってしまいました。

幕末の剣豪で、北辰一刀流の創設者千葉周作が若い頃のお話。武者修行の旅の途中、今の愛知県三河の、ある屋敷にお世話になりました。

その屋敷では、夜になると若い衆たちが、これといった道具もなしに、沢山の貝や魚を取ってくるのです。たずねると、潮がひいてできる潮溜まりに、取り残された魚を手づかみにするとのこと。「よければ、案内いたします」というので、早速出かけることになりました。

なるほど、潮がひいてできる潮溜りに、魚や貝が取り残されていて、面白いように獲れます。調子に乗って、沖へ沖へと進んでいくと、しばらくして案内人があわて出しました。聞けば、どちらが岸か、沖かがわからなくなったと言うので

す。星を見ようにも、あいにく空は曇っていますし、幕末ですから外灯なんてありません。松明を全部つけても、手元は明るくなりますが、闇はますます暗くなります。

そんなとき、周作の耳にかすかに千鳥の鳴く声が聞こえました。「昔江戸城を作った太田道灌が、物見に出かけ、あまりの暗さに潮の干満がわからなくなった際、千鳥の声を聞いて干潟のあることを知った」という故事を思いだし、その声をたよりに進み、何とか岸にたどり着くことができました。

若い衆が、口々に周作の博識ぶりを讃えていると、話を聞いていた屋敷の主人が、突然怒り出したのです。

「長年浜辺に住みながら、お前たちは何と馬鹿者揃いか。今夜は幸い千鳥が鳴いたからいいものの、鳴かなかったらどうなる?そんな時には、まず松明を消すんだ。なのに、松明を全部つけたという。あきれ果てた馬鹿どもだ。

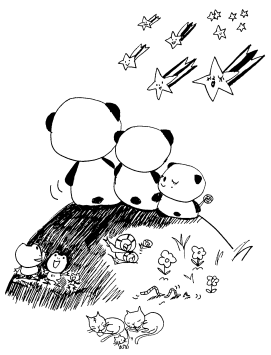
よく考えてみろ。松明をつけても、足元が明るくなるだけで、遠くはますます暗くなる。そんなときには、松明を全部消せば、どんな闇夜でも、あるかないかの光に目が慣れて、沖と岸との見分けくらいは、自然とつくものだ。」

これを聞いた周作は、目の覚める思いがしたそうです。

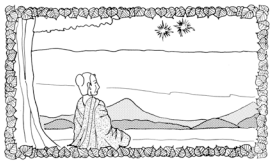
私たちは、自分の人生を輝かせようとすればするほど、手元ばかりに気を取られ、どこに向かって進んでいるのかを、見失っているのではないでしょうか。

親鸞聖人は、そういうあり方を、自力と言われたのです。それは、歩みを積み重ねるほど、「俺はこれだけやってきた。」「俺の道に間違いはない。」「それを認めると、俺が今までやってきたことが無駄になる。」と、頑なに自分を主張することで、迷いを深める生き方でもあります。

自己主張という松明を消して、阿弥陀様の光に照らされた自分の姿を見つめたときに、歩むべき方向が見えてくる。それをより所にする生き方を、他力の生活というのです。



一日のうち一度でも、お仏壇の前に座って、お念仏申す。阿弥陀様の光に照らされて、自らをふり返る。それは、人間が生きる上で、本当に大切な時間ではないでしょうか。秀



極楽寺掲示伝道
けいじでんどう

4月の言葉

世の中には、「ほんのちょっとで大違い」ということがよくあります。「俺がやらなきゃ**誰が**やる」と、「俺がやらなきゃ**誰か**やる」では、ほんちょっとの違いなのですが、責任感は全く変わってしまいます。

同じように、「私が仏教を」学ぶときには、私の知識が増えるだけですから、私の生き方が問われるわけではありません。いや、知識が増えるだけに、それを自慢にし、人を見下す道具にさえ使いかねないのが私たちです。それでは、仏教の本質が見失われてしまいます。

しかし、「仏教に私を」学ぶとは、私の生き方そのものが問われるわけですから、ものの見方、考え方も、大きく変わっていくことです。自分の傲慢さを知らされ、自分を支えて下さる世界を知らされるのです。

浄土真宗系列の大学である武蔵野大学の山﨑龍明先生は、仏教系の大学とは知らずに入学した学生から、よく「仏教を学んで、何の役に立つのですか」と質問されるそうです。しかし、役に立つかどうかの前に、「私はどんな生き方をしているのか」と、自らを見つめ直すことは、本当に大切なことです。目先の損得に流されることで、自分の生き方を見失うことの方が、怖ろしいことではないでしょうか。

さて、私は「仏教に私を」学んでいるのでしょうか。いつしか、「私が仏教を」学んでいる立場にいるのかもしれません。改めて自分の生き方を、仏教に学んでみたいと思います。■

1月の言葉

この言葉を少し変えると、「幸せな環境にいるから感謝しているのではない。感謝できる心を持っているから幸せなんだ」と言えるでしょう。いくら幸せな環境にいても、それを当たり前だと思ったり満足することを知らなかったら、感謝することはできませんし、幸せだと感じることもできません。

仏教には「ウザイガキ」という言葉があります。モチロン

近頃の若者の言葉ではありません。漢字で書くと「有財餓鬼」。たくさんのものに囲まれながら「まだ欲しい、まだ欲しい」と求めている有り様を言います。考えてみれば、今の時代は「有財餓鬼の時代」と言えるのではないでしょうか。使いきれないほどのお金を持ちながら、それでも「まだ欲しい」とマネーゲームに興じるのが今の時代のお金持ちの常識だそうです。そのおかげで私たち庶民は、大きく振り回されているのですが。バブル崩壊やリーマンショックなど、その最たるものでしょう。どうも、求める方向が違っているような気がします。

波北彰真さんの言葉に、

「よろこびの真ん中にいても
よろこびに気づく心の眼を持たなければ、
よろこびに出あえないままに終わるでしょう」

というものがあります。いくら幸せな環境にいても、その幸せに気づくことができなかったら、幸せとは言えないでしょう。しかしどんな環境にあろうと、自分を支えて下さる世界に手を合わせることができるならば、幸せを感じとることができるのではないでしょうか。そんな心の眼を育てて下さるのが仏法だと、教えられるのです。■

２月の言葉

心臓は、私が気づいていようが、忘れていようが、寝ている間でさえも、働きづめに働いてくれています。その心臓に病気を抱えておられる方は、大変なご苦労でしょう。

しかし考えてみれば、働きづめに働いてくれている心臓に、感謝したことなどあったでしょうか。私たちが生きていくには必要不可欠な、空気にも、水にも、太陽にも、大地にも、感謝しているかと言われると、頭ではわかっているのですが・・・。

実は、本当に感謝しなくてはならない世界とは、一番近くにあって、一番気づきにくいものなのかもしれません。そんな世界に気づき、感謝することができる生き方を、心豊かな生き方と言うのではないでしょうか。多くの恩恵の中で生かされているにもかかわらず、気づくこともなく、当たり前のようにふんぞり返っている姿は、心貧しい生き方です。

生かされて生きてきた 生かされて生きている
生かされて生きてゆこうと 手を合わす 南無阿弥陀仏

（『生きる』中川静村）

阿弥陀如来という仏様は、私が手を合わせるときも、合わせていないときも、忘れていても、寝ていても、常に、私を思い、寄り添って下さる仏様だと教えられます。共に喜び、慈しみ、私の有りようを悲しんで下さるのだと。

その願いがこめられた、南無阿弥陀仏のお念仏をよりどころにする生き方は、生かされて生きていこうと手を合わす、尊い生き方を生み出してきたのです。今私たちが生きている現代社会に、最も必要な生き方が、ここにあるように思います。■

3月の言葉

この言葉は、倫理学者で広島大学名誉教授の白井成充博士が、東大生であった息子さんを亡くされ、深い悲しみの中で作られた歌だそうです。

お釈迦様は、人生とは思いもよらない悲しみが襲いかかってくるものであり、それは誰も避けることはできないと教えられました。とは言っても、人間そう簡単には割り切ることなどできません。それに、白井博士の悲しみの深さに、私が簡単に共感できるはずもありません。しかし、私の想像を超えた悲しみの中で、それでも生きていこうとされる博士の姿が伝わってくる歌です。その博士を支えたのは、阿弥陀如来の心でした。阿弥陀如来は、悲しみを避けることができない私たちを、深く慈しむ中で「また会える世界」、浄きみ国（浄土）を用意して下さっていたのです。

また会える世界があるというのは、本当に素敵なことですね。また会える世界があるからこそ、「あの人が悲しむような、生き方はできない。」「今度会ったときには素敵な思い出がたくさん話せるような人生を歩んでいこう。」「お浄土では、すれ違いも仲違いのない、仏様として出遇い直すことができる。」と、ぬくもりの中で、亡き人と共に生きることができる。死んだら終わりの人生は、切なく、寂しいだけの人生です。

悲しみの真ん中で白井博士は、「この私のためにこそ、浄土は建てられたのだ」と、阿弥陀如来の大慈悲心の真ん中にいたことに気づかれたのでしょう。そのぬくもりの中で、生きる力をいただかれたのでした。そして、私たちも同じく、等しく、そのぬくもりに包まれているのだと、教えられるのです。深く、味わいたいものです。■

お経本の作法

◇ お経本は、大切なものですから、丁寧に扱いましょう。

◇ 足の裏をつけるところには、置かないようにしましょう。

（できれば、膝の上や、座布団の上に置くようにしたいものです。）

① 開く前に、まず、いただきます。

② 開いたら、胸元に保持します。

③ 閉じた後にも、いただきます。

「いただく」とは、「戴（いただ）く」（もらうの謙譲語（けんじょうご））ではなく、「頂（いただ）く」（大切にする・敬い扱う）の意味です。

お経本を、敬（うやま）い大切にするということは、ただ、仏様を敬い大切にするということだけではありません。阿弥陀様とは、「私の人生を、敬（うやま）い大切にして下さる」仏様です。つまり、阿弥陀様のみ教えを敬い大切にするということは、自分の人生を本当に敬い、本当に大切にするということなのです。

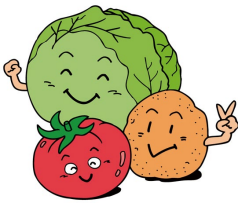
まだまだ、東北は寒い！

カイロを被災地へ送ろう

4月10日まで

山口は、暖かくなってきましたが、東北はまだまだ寒いようです。この冬残ったカイロがありましたら、ぜひご協力下さい。４月10日まで、集めています。よろしくお願いします。

野菜サポーター募金



募金終了しました。

宮崎新燃岳噴火被災地の野菜を、東北大震災被災地へ届ける「野菜サポーター」。3月13日の第１便以降、11月末までに40ヶ所以上に1359便あまり、箱数にすると6845箱以上の野菜・ジュース・お菓子・お肉等が届けられました。東北でも、宮崎でも、大変喜ばれたようです。発送は、３月末まで続くようですが、募金は終了となりました。極楽寺でも、たくさんの皆様にご協力いただきました。本当に、有り難うございました。

極楽寺募金総額　125,000円

ご協力ありがとうございました。

随時更新しています

極楽寺ホームページ　極楽寺.com で検索して下さい。

極楽寺だよりを送りませんか

極楽寺では、都会に出られているご門徒の方や家族の方々に有縁の方々に、極楽寺だよりをお送りしています。都会の子どもさんやお孫さんに、送られてはどうでしょう。連絡先を教えていただければ、お寺から直接、お送りいたします。